

無意識の差別をなくすために

郡山市立郡山第一中学校 1年 横田 莉望

「黒くてきれいな髪だから髪を伸ばしてヘアドネーションしてみない？」美容師をしている親戚から言われたのが三年生の時。

初めて聞く「ヘアドネーション」という言葉。ネットを使って調べると、髪の毛を寄付する活動のことで、幼い私にはよくわからなかったことを覚えています。

私の中での寄付とは、「赤い羽根募金」程度で、お金を募金箱に入れることだと思っていたので、髪の毛を寄付する事には？マークがいくつも付きました。けれど、お金をださなくても、自分の髪を寄付すれば、誰かのためになるならやってみようと思い、母に「ヘアドネーションするから髪を切りに行く。」と伝えると、「髪の毛の長さが三十センチ以上ないとできないから。三十センチ切ってもショートくらいの髪になるまで伸ばそう。」と言われました。

ヘアドネーションするため肩くらいの長さの髪を二年かけて、三十センチ以上切ってもショートカットになるくらいまで伸ばしました。

五年生の冬、やっと髪の毛を寄付できると思い、父と母に「ヘアドネーションするから髪を切りたい。」と伝えました。「髪の毛を寄付するなんて、すごいね、えらい。」と褒められるかと思っていましたが、父から予想外の言葉が返ってきました。

「ヘアドネーションって知っているよね。」

「髪の毛を寄付する事だよね。」と自信満々に答えました。

「誰のために使われるか知っている？」

父の言葉に、ハッとする私。詳しいことを調べていない私の知識は、三年生のままの寄付イコールいいことで止まっていました。

父は真面目な顔で話し始めました。

「りのが髪を誰かのために寄付しようとしていることは、とてもいいこと。正しいことだと思う。でもね、自分でなぜ寄付したいのか、寄付した髪はどう使われるのかまで調べてなかったよね。きちんと、自分で調べて、考えてそれでも寄付したいと思ったらヘアドネーションは賛成。でも今のりのがヘアドネーションすることには反対。」

と、言われてしまいました。何かを寄付する事は誰かのためになるから正しい

と思っていた私は、その行動の意味など何も考えていませんでした。

ヘアドネーションを調べていくと、ヘアドネーションは、小児がんなどその他様々な理由により髪を失ってしまった子供たちに、髪の毛を集め、医療用ウィッグをプレゼントする活動だと知りました。

父に自分で調べ、感じたことを伝えました。

「がん治療を行う子供たちが髪の毛を失うことは悲しいし辛い。髪の毛がないと恥ずかしい。自分だったらウィッグがあることで、友達と遊んだり、出かけたりできるからヘアドネーションをしたい。」と。

父は、ヘアドネーションすることに賛成したうえで、こんな話をしてくれました。

「お父さんは、ずっと放射線治療の仕事をしてるんだ。小児がんの治療にも多く関わってきたし、それ以外の治療にも関わってきたんだ。がん患者さんは、放射線治療の影響で髪の毛が生えてこなかったり、手術して、顔の形が変わったり、女性の方は、胸が片方なかったり、がんを治療するために大変な思いをしている。だけど、がんを知らない人たちは、体の一部がなかったりすると、心無い視線、言葉をかけたり、病気を理由に、やりたい事ができなくなったり、社会的に孤立してしまう差別を受けることが少なくないんだ。病気で差別を受けることはとても悲しいこと、でもそれが現実なんだよね。りのがヘアドネーションして、その髪でウィッグが作られ、そのウィッグを付けた子がお出かけできるようになればいいね。」

がんであることで差別を受けることは、すごくショックでした。中学一年生になった私は、今でもヘアドネーションは正しいことだったのか、無意識の差別的な行動をしてしまっていたのではないかと考えることがあります。ウィッグを付けた子が外出したりするためにヘアドネーションしたのは、結局、差別があることを知ったからで、差別を無くすためにはなっていない。と。

私にできることは、なんだろう。常に何が正しいのか考え続けることだと思いました。考えて、疑問に思ったことなどを父や母、友達、先生などと話をし、そしてまた考える。考え話す行動が、誤った偏った考え、無意識の差別を生むことにつながらないと思いました。